

「ええ天気やわ、海に散歩でも
行こっかな」

すがすがしい朝です。小さな精霊
トインクルは、須磨の海にお散歩に
来てます。

「ふっふっふっ…おったおった」

その声は大きな精霊ビッグです。

ビッグは、トインクルにいたずらをする
のが習慣です。

ビッグはこっそりとトインクルに気付かれ
ないように、手をのびします。



藤原 健二

T&B

～トインクルとビッグ～

第一話

すてきな散歩 須磨

KOBE 観光漫画

「あら？」

気が付くとトインクルは
なぜか山の中にいたのです。

じつは、それはビッグのしわざ
で、海にいたトウインクルを
勝手に山に移動させてしまっ
たのです。

せっかく、さわやかな海を
お散歩していたのに、がっかり
です。

しかし、ふと山をおりると
そこは須磨寺だったのです。

とても静かで、すてきなお寺です。
トウインクルは、気分を変えて
須磨寺を気持ち良くお散歩する
のでした。



1950年代メルセデス・ベンツが、ミツレミアで勝つ事だけを目的に開発した300SLRを兄貴分に持つ190SL。当時スポーツカーとして確固たる地位を築いていた300SLは、一般のカーマニアにとって、とても手の届く存在ではなかった様で「もっと手軽で安全にオープンモータリゼーションを」という声に応えスポーツカーとしての性能を犠牲に少しでもその品格と華麗なボ



神戸クラシックカークラブ会員の自慢のクラシックカーが次々と登場してきましたが、自慢の車の思い入れを堪能していただけますでしょうか。クラシックカーよ永遠に！いつまでも少年のように！

華麗なる!?変身 190SL

メルセデス・ベンツ190SL1960年式
文=永田賢治

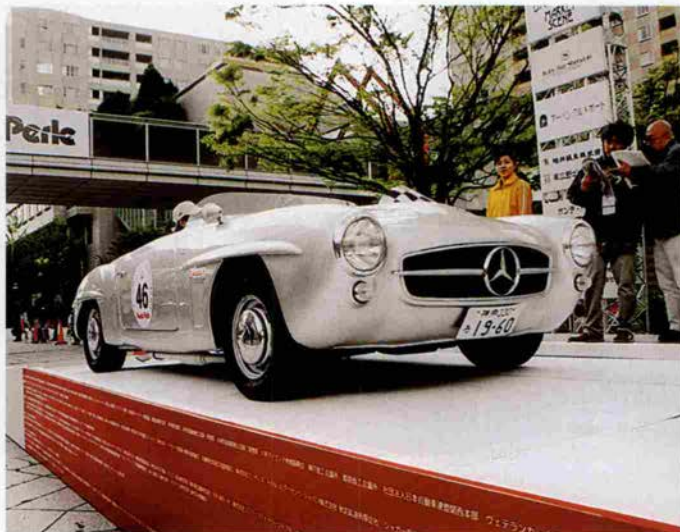
Essene Bambino

いつまでも
少年のように



神戸のクラシックカー

デザインを承継させ1954年に発表されたのが190SLである。前述した通り、純粋なスポーツカーというより、ツリーングススポーツカーとしての色が濃いこの車は、その後約10年間生産されるヒット作となり、現在においてもそのコンセプトを引き継いでいる。SLシリーズの原点であるといえる。1950年代のカーマニアと同じく、私にとっても300SLは、雲の上の存在。しかし流麗なスタイルをゆずり受けた190SLなら、いつかはチャンスが来るかもしれないと永年思っていた所、昨年初頭、県



2004年ボンテ・パレル 愛妻と私と愛車で出場、完走。



非馬力のためにできるだけ軽量化に成功。約150kg



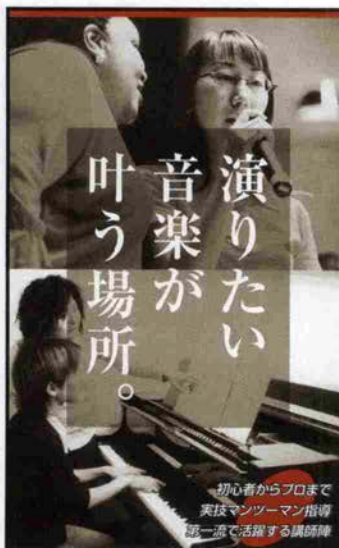
エンジン形式	4L
	ボア×ストローク=85×83.6mm
排気量	1897cc
最大出力	120HP/5800rpm
最大トルク	15.8kgm/3800rpm
ギヤボックス	4速シンクロメッシュ
最高速度	175km/h
全長	4220mm
全巾	1740mm
全高	1320mm
空車重量	1150kg

内某所に機関好調のSLがある、との情報を頂き喜び勇んで出かけたものの初対面の彼女の姿に愕然と立ち尽くすのみであった。

なる程エンジンは一発始動、M/Tも好調だがその内外装の惨状たるや、床は穴だらけ、シャーシは腐食、トランクは原形をとどめずという有り様である。しかし、せっかくの縁と、自分を納得させ、彼女を早速持帰ったものの本来の姿に復元するには至難の技、結局、オリジナル性を全く無視しほんのチョッピリ300SLRを意識しつつ現在の姿へと変身させていった。その間、都自動車竹田専務、関西自動車の方々を始め、彼女のレストアに携わって頂いた諸兄に多大なる労を頂き厚く感謝の意を表し筆を置く。

神戸クラシックカークラブの皆様のご協力により、このエッセレバンピーノを連載してきました。

まだまだ多くのクラシックカーがございますが、いつか紹介できる事を願っています。ありがとうございました。(担当・大原宇勉)



コンテンポラリーミュージック専攻

ギター/ベース/ドラム/ヴォーカル/ジャズピアノ/キーボード/音楽器

クラシックミュージック専攻 PA・レコーディング専攻
コンピュータミュージック専攻 総合音楽専攻

完全フレックス制カリキュラム編成

自分のライフスタイルに合った時間割編成により働きながら大学・高校とのWスクールも可能!

パークリー音楽大学 編入学認可校

交換単位数がこれまでの48単位から60単位に増えました。最短2年でパークリー音楽大学卒業資格取得可能!

03年度パークリー音楽大学入試試験 本学より20名合格!

04年秋期生 05年春期生

学校説明会開催中!

お問い合わせ先
フリーダイヤル 0120-117540

TEL/FAX イイコ-ポ

※学院室内送付(無料)は、TEL/FAX/Web(携帯可)
ハガキでもお申し込み可能です。神戸っ子係。

〒657-0059 神戸市灘区藤原南町5-4-1

パークリー音楽大学提携校
甲陽音楽学院

http://www.koyo.net Email: gakuin@koyo.net

甲陽音楽学院がホスト校に

BINサミット2004 世界9カ国から音楽教育機関の代表が神戸に 6月19日～5日間



レセプションパーティで、ラリー・モンロー氏、
管内校長、井戸兵庫県知事、矢田神戸市長



沖縄エイサー他日本の伝統音楽で各国からの参加者を歓迎



高品質のテレビ会議システムを採用して行なわれたサミット。

各国からの参加者が、自国のコンテンポラリーミュージック(ポピュラー系音楽)教育の現状などを話し合った。



「1995年の1月18日、甲陽音楽学院は、パークリー音楽大学との提携式に臨む予定だった。1月17日の大震災で提携も中止。そして9年5ヵ月、世界の11カ国のパークリーの代表が揃うのは夢のようで、菅内学院長のお喜びはひとしおと思います」井戸敏三兵庫県知事、そして矢田立郎神戸市長から暖かいメッセージ。ふざかしい甲陽音楽学院(菅内孝憲学院長)は、関学出身の院長のスケールのある行動で、BIN(Berklee International Network)サミット2004の大会開催成功を導いた。ボストンにあるパークリー音楽大学と神戸を、高品質の通信システムでつなぎ、各国の代表がロジャー・H・ブラウニングと意見交換を行なった。このシステムを使用すれば、いずれ甲陽の学生は、パークリー音楽大学の著名な教授陣から生の指導を受けることも可能になると期待されている。

■私の意見

国際都市神戸の 未来と大学

野上 智行

神戸大学長



神戸大学はこの春、神戸市をはじめ、関係方面のお力添えによりポートアイランドに「神戸バイオテクノロジー研究・人材育成センター」と「神戸大学インキュベーションセンター」を開設することができました。これによって神戸大学と地域産業との連携を更に充実させるとともに、神戸に集結する先端医療に関する産業や研究機関との密接な連携をはかることができることとなりました。

都市はいつの時代も国際的な連携の拠点でありましたし、都市が国際的な連携拠点として機能しなくなれば、その将来は極めて厳しいものとなります。国際的な競争と協調を必須とする現代を生き抜くためには、都市が世界のレベルの先端研究を進める大学を擁し、その大学との密接な連携が不可欠な要素となることは容易に想像できることです。

神戸は多くの大学を受け入れ、大学を育て、大学とともにあることで国際都市神戸として更なる発展を確実にするものと考えます。世界各国から若者が神戸に集い、神戸で育っていくことは将来においても大変重要な意味をもってきます。神戸の伝統を生かし、国際社会が神戸を必要とし、国際社会が神戸を育てていく循環が生まれる環境を構築する必要があると考えます。

神戸が人類の新たな可能性と希望を具体化している国際都市としてますます発展することを願います。神戸はそれを為しえると信じます。その実現には、大学や高等教育研究機関を育てることのできる神戸であることが不可欠であると考えます。この点において、神戸市は都市における高等教育研究機関の重要性を強く認識されており、大学や研究機関との連携を積極的にすすめておられます。その具体的な現れが冒頭に記しました神戸大学の新たな拠点の構築です。この4月から国立大学法人となった神戸大学は、国際拠点大学として更なる進化をとげることでその責務を果たす所存です。

■ ポエム・ド・コウベ

断片

詩 竹中 郁

画 小磯 良平

1

海に手をつけたり、

木に石を投げたり、

シャツに首を通したり、

そんな埒もないことをしてゐるとき、

まま、私は大きな胸につきあたった、と感^{かん}じる。

2

シャツを着^きつつある。

私は頭^{あたま}をだす、

手を動か^{うご}かす、にも拘^{かは}らず手がでてこぬ。

私の胸^{むね}は誰^{たれ}かに預^{あづ}けられた。

草むらのなかへ石を投げこむ。
 答へのやうに鳥がとびだす。
 神はたしかに在します。

(詩集『署名』から)



腕を組む婦人 昭和33年作
 神戸市立小磯記念美術館蔵

紳士入門 ⑩

How to be a gentleman

パーティー紳士

文・竹田 洋太郎
え・鴨居 玲

近ごろやたらに流行するものにカクテル・パーティーがある。この際紳士としては、カクテル・パーティーにいかに対処するかということは大きな課題となってきた。欧米諸国においては、カクテル・パーティーをはじめとする各種パーティーなるものが、生活の一部であつてこれに対処するには紳士としてどうすればよいかは、常に研究されている。わが日本においては畳の上で職制に従い着席し、最後には乱雑となるべき宴会の対処法こそ封建時代より論議されているが、このパーティーについては研究の対象として未開拓の分野が多いのである。

すでに紳士入門でのべた「速成紳士会話」「英会話紳士」等の各編は、多くのパーティーの席上を想定して書いたものであるから、ことさら採り上げる必要もないのであるが、基本的な注意事項のみを一応のべてみたい。

パーティーでは、招いた紳士は「心から」客をもてなし招かれた紳士は「心から」それを楽しまねばならない。その「心」とはあくまで紳士のそれであつて、料亭のおかみやバーのホステスのそれでないのは当然である。

まず紳士としてパーティーを心から楽しむには、提供された酒を大いに飲み、列席者と愉快な(相手には不愉快であつてもよい)会話をかわし、招待者には、いや味をいうことであらう。

酒を大いに飲むには要訣がある。パーティーのよく催されるホテル等のボーイ氏と仲良くなり、時にはなにがしかの心づけをしておくと、パーティーに出された一番うま

い酒をいつも絶やさず持参してくれる。さらにその際、バーをべつとして最も高価な酒のビンを確認しておいて注文すれば、あなたは趣味のよい人物として列席者に尊敬され、主催者もしくはホテルに、それだけ大きい負担を与えることができる。

料理においても同様だが、紳士はやたらにパクツクものではない。キャビアとかフォアグラ等の最も高級のもののみを賞味することが必要で、もしキャビアがなければ「きょうの料理はキャビア抜きだな」と軽く主催者側の人物に聞かせることである。

日本のパーティーは外国と異なり、バーのホステスが直接にかり出されることが多い。その際自分の近くに女性を独占するのも一興である。この方法については、別の機会に詳述するが、こうすれば主催者側およびホステスを指揮すべきマダムがヤモキすることになっている。主催者は重要な取引先の招待客に女性が集まっていることを望み、マダムは二次会のため帰途立ち寄ってくれる人物を物色している。この間をぬって女性を集め、服装、アクセサリーからスタイルにいたるまで、女性を賛美するのは紳士にとってスリルにみちた楽しみである。

席上紳士の占るべき位置は考慮を要する。元来カクテル・パーティーで「祝辞」や「挨拶」をするべきものではないが、日本ではよく行われる。そのため紳士は祝辞を述べため引つ張り出されないとどころであつて、前述のごとく、酒と料理と女性の供給に便な位置でなければならぬ。パーティーに出席されれば、真の紳士は必ずそう

「別冊紳士入門図解」



いったところに位置しているのをあなたは発見するだろう。不幸にしてもし祝辞を述べるよう命じられたならば紳士らしく、最も不得要領な言葉をたらねて、列席者を退屈させることである。席上退屈の結果さわめきが起こりはじめたら話しているうちに発見した好適な場所に移ればよい。

カクテル・パーティーの主催者となった場合、紳士はどうすべきか。おおむね、最低の費用で最大の楽しみを与えようとするのは庶務課長や秘書課長の知恵である。それ相当の費用をかけたつても、招いた人が充分飲んだり食ったりしないうちに、席を立ち去るようにした方が、後かたづけが楽であるように計画するのが紳士である。

かつて関西のさる外国系会社のパーティーに招かれたが

その場所はホテル最大のホールで、テーブルの間隔はバックカードが駐車できるほどとってあった。料理は極めてよく選ばれた高価なキャナッペが少量。酒もスコッチ、ブランドー、ワイン等高級品のみ。ところがここでブランドーを注文し、キャナッペをつまんでいると、あまりの広さに、宿題を忘れて雨天体操場に立たされた中学生のごとき気持になり、早々に退出する客が多かった。これなどまことに紳士の主催するパーティーといえる。

なお、最近会費を徴収するパーティーも多いが、さる中老の紳士は「会費をとるパーティーは絶対に出席しない」という原則を守っている。この態度をもつて範とすべきに足る。

洋風育ちの、その上洋行廻りの私等は別といたしまして、今日もパーティー、明日もパーティーとはこらしげにその忙しさを誇って居られる方々も、その実、テレビや映画の或る場面を想像しながら必死に優雅なる物腰をして居られると云う涙ぐましいものですが、このパーティー族にもABCの三種の種族がありますように、あらゆるパーティーは云うに及ばず冠婚葬祭、すべての所に顔を出しそして受付を手伝ったり、酒をついで廻ったり、初対面の人でも百年の知己のように振ってくれる等特種な才能を有しています。と云って別に会費をこまますわけでもありません。概して好人物のようです。これがAの種族、次にB族と云うのはいたかないか殆んど記憶にないのにいざその会の記念写真を見えますと、有名人の横に必ず写っている人で、写真だけ見るならば、その有名人とあらゆる問題を語り終って「アハ……」と笑ったりした瞬間の表情で登場している人種です。即ち、ミスター・パーティー、ミス・パーティーと申す種族です。三番目のC族と云うのが、ホールの片隅に集まり、あいつはA族、こいつはB族と品定め、あけくは会費の割に酒が少いのとブツ／＼云っている目つきの悪い人達、何れも勿論大物ではありません。小生等も他人の言によれば、このC族に属するようです。さて我が師匠、洋太郎先生は何れに属して居られます事やら。レイ・カモイ

神戸のこと 手当り次第

淀川 長治
え・中 西 勝



ウイルキンソンのレモネードが、いつでも台所の棚に並んでいた
トリアロードにいくと必ずコードリエでチョコレートを買った。

元町の三星堂にいくと紅茶はセットになっていて銀盆の上に銀の
ポットとレモンと砂糖とクリームと、そして大きなティー・カップ
は温められてのっかっていた。

ユーハイムでビスケットを箱につめてもらう。魚の形をしたビス
ケットが一番おいしい。フロインドリーブはチョコレイトがうまい
布引の淹のブラック・エンド・ホワイトだったと思うがそこではコ
ーヒーをその場でいって一人前づつ熱湯でこして面白い筒のような
コーヒー容れでテーブルに出す。

目の前のみどりの迫る山肌には、くっきりと錨（いかり）のマーク（おゝなんとあのスマートなデザイン）の浮きぼりが、まるで上等のカーペットの肌ざわりで目にいいこんで、五分も散歩するともう布引の滝がそこにある。

下駄ばきで市電にとびのると、あッというまに須磨。タオル一枚に海水着を包んで、一日泳いで陽焼けして帰ってくると「なにしょんねん、今夜はみんなで弘養館のビフテキ喰べにゆくのかないの」と云うわけで、あわててシャツを着かえて、みんなでぞろぞろとあの二階にあがる。すると純白のテーブル布が目にもちよく、さあ出てきたビフステーキの大きいこと。「あたしはよう焼いたほうやわ」「ぼくは、ちよっと赤身のあるほうや」。その楽しいこと、そのうまいこと。

×

あれはもう四〇年まえの神戸。久しぶりでその神戸に行ってみた去年の夏。

「ああ、きたな」「えらい、ガラが悪いこと」これが本当に申訳ないが第一印象。

レインクロフォードもコードリエももうないのであろう。それがさがす気もなくなつて、ひとりオリエンタル・ホテルの二階からぼんやりと外を見て、海の匂いもメリケン波止場の匂いもうすれた外を見ているうちに「ああ、あほらし」とひとりつぶやいて風呂場のせんをひねって風呂にとびこんだ。

×

東京に来て、これが海かと江の島の砂の黒さがっかりした。須磨の海が年々きたなくなつて……と聞かされて、それでこわごわ須磨のなんとかいうホテルのような食堂にあがって、ひと目、あたりを見廻したら、ああと声が出た。その美しさは横浜がくやしがつてあばれ廻ったとしても、これだけの美景はどこにもあるまい。それからその足でオリエンタルの支店のような舞子ヴィラに行ったところ、これはもうシネラマの中にサンソとオゾンがほんとに立ちこめて、目の前、手のとどくばかりを巨船がゆうゆうと白い波を描いて

これが神戸、やっぱり神戸はあったのだ。

× この山、この海を……神戸っ子はいたいどうお感じなのであるう。

つい最近、横浜のマリン・タワーきんべんを散歩すると、海にそった山下公園が、まるでニューヨークのリバアサイド・パークのように、みんなに愛されて、そろそろその人の散歩スタイルもまるでアメリカ流。若い男女がとてもきれいで上品になっている。けれどもいかにも「海をいとしんで」「大切にありがたがって」……いるのである。

神戸はあの海あの山をどう……愛され美化運動に利用されているのであろうかと、これでもまだ神戸っ子のわたくし。心配。

× かごいけ通りから布引。あの良さ。ロサンゼルスサンタ・モニカへのドライブ・ウェイ・ムード。「あほくさ、大げさなこと」。

云う勿れ。あんたは神戸にすぎず神戸がわからへんのや。

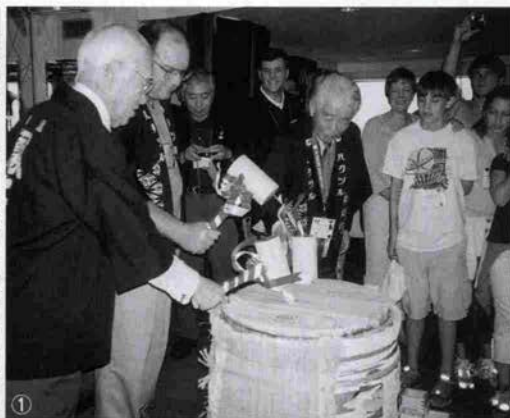
垂水から明石への海岸ドライブ・ウェイはロサンゼルスメリブの海岸ムード。とにかく山があって海が、これがやわらかい海で、その、いかにも海らしい海。東京の海は黒い泥砂で、まるでグスイのでっかいような海。雲まで東京のアカが染っている。

× 神戸こそは日本一のハイカラな町で、神戸っ子のそのハイカラ感覚からくる洗練されたスマートさ、それが……今日……私には嗅いでも嗅いでも匂わない。匂うものは、行儀の悪い、厚かましい、安物にすっかり馴れた、バラケツのなれの果ての、一週間も風呂には入らないような神戸。これでよいのでありましょうか。

とこれだけニクッタライことをぬかしてをいたなら「コラ、アホ、お前さいきんの神戸もロクに見んと……ナンカシテケツカンネン」と……そう云って下さるであらうと、思いましてハイごめんやす。

話題のひろば

2004年ロータリー世界大会 ●国際ロータリー第2680地区主催 KOBENAイトクルーズ 大盛況



- ①松岡実行委員長と灘の酒で鏡開き
- ②ルミナスPART II
- ③メリケンパークの神戸会場で矢田市長を囲んで
- ④船上でウェルカムパーティー
- ⑤大人気のKOBEBEEF!



5月23日(日)から26日(木)まで、大阪で開催された「ロータリー国際大会」(4万人規模)の中、兵庫県内の第2680地区(今井鎮雄・元R1理事R1大会副実行委員長・神戸/松岡通夫実行委員長)がホストとなって24日、神戸文化の発信・交流を中心とした「KOBENAイトクルーズ」を開催。771名が参加し(内外国人523名)日本人(132名)スタッフ(116名)、大阪天保山から中突堤まで、クルーズ船「ルミナス」で港都神戸を楽しんだ。

船上では、大人気の神戸ビーフ、神戸ワイン、灘の酒、そしてジャズなど「神戸ブランド」を紹介。船内5会場で鏡開きとビュッフェランチとジャズ演奏という、いきいきとしたプログラムで、船内は盛り上がり、夜の中突堤に入港。

神戸消防音楽隊の歓迎演奏と、夜景の美しさで外国人たちは「ビューティフル!」「ワンドフル!」を連発していた。とても震災を受けたまちとは思えないと…。

下船後は、第二会場を、海洋博物館前広場で、矢田立郎市長の歓迎あいさつと、啓明太鼓、中国獅子舞、よさこいソーランなどの舞台演技に拍手も多く、震災からの復興と展望に交流の輪が広がった。



林 敏之（はやし としゆき）

1960年2月8日徳島生まれ。徳島県立城北高校から同志社大学を経て神戸製鋼所へ。元ラグビー日本代表。日本代表を13年間務め、代表キャップ38。神戸製鋼の7年連続日本一にも貢献。1990年、オックスフォード大学留学中にケンブリッジ大学とのパーシティー・マツチに出場し、ブルーの称号を獲得。現在は神鋼ヒューマンクリエイトに在籍し、感性教育をテーマに活動中。

<http://www.t-hayashi.jp/>

新連載

林敏之のヒューマン対談

第5回

作曲家・大沢みずほさんと語る 『エライヤツチャで金メダル!』

★阿波踊りって、シンクロしてるやん!

林 いよいよアテネオリンピック。「阿波踊り」をテーマにしたテクニカルルーティンが、どんな仕上がりになっているのか楽しみだなあ。

大沢 五輪の曲作りは本番の一年以上前から始まりますから、今回の題材を何にしようか井村雅代先生と考えていた時、たまたま去年の夏に林さんが連れて行って下さった徳島の阿波踊りで演技のイメージが膨らんだんです。井村先生と顔を見合わせて、

「これや!」って決めたんですよ。ほんと林さんのお陰やね。

林 いやー、そう言われるとお誘いして良かったなあ(笑)。ほくは、仲間と一緒に大名連というグループで毎年出てますからね。あの時はちょうど友人の車も二席だけ空いていて、井村先生と大沢さんに一緒にしてもらったんですね。

大沢 井村先生はものすごくお忙しいのに、ちょうどスケジュールが合って、二人で本場の阿波踊りに



大沢みずほ（おおさわ みずほ）

作曲家。大阪音大ピアノ科卒。CM、テレビ番組などの音楽を多数手がける。94年からシンクロナイズド・スイミング日本代表の曲を担当。和の要素を入れた競技曲を作り続けている。神戸市生まれ。

参加できたのは、オリンピックは「阿波踊り」で行け！ってことやっただけでしょうね。

林 ちょうどあの日は天気が良くなり、ものすごい熱気でしたからね。ぼくらの連は最後に枚数の一番長い両国通りで踊り盛り上がりましたよ。

大沢 手を振ったのも分からなかったでしょ（笑）。エライヤッチャ、エライヤッチャ、ヨイヨイヨイヨイ……。両手首を返ししながら目の前を通り過ぎていく連隊を見てたら、阿波踊りって、シンクロしてるやん！って思いましたね。

林 チームの合宿の様子をニュースで見たけど、水しぶきがすごいらしいね。やっぱり阿波踊りやから泡で表現するの？（笑）

大沢 ほんとバシャバシャするのは、あまり好ましくなかったみたいです。シンクロの王道はどんなに激しい動きをしても、水しぶきひとつ立てずきれいなフォームを保たないといけないとされていますからね。でもシンクロ界も情緒的なものから、連続技のスピード感あふれるものへと変化しつつあります。

すので……。まあ、最後はすごいことしますから楽しみにして下さい。

林 金メダルを期待してますよ（笑）。

★勝つ音楽を作るんや！

林 シンクロのおもしろさは、音楽と一体になった動きにありますよね。曲はどんなふうにつけていくのかなあ？

大沢 曲作りはオートクチュールの服作りのようにですね。本番まで修正、修正が何度も続いて、最後に寸分の狂いなく仕上げるんですよ。今回の「阿波踊り」も大変やったね。阿波踊りの音楽を題材にしても、曲が早すぎても遅すぎてもいけない。オーブニングでジャッジにかっこいいと思わせ、ぐっと注目させるような構成にしないとロシアに勝てませんからね。私はいつもプールの外で、もがき苦しんでいますよ（笑）。

林 94年の世界選手権で奥野史子さんの「夜叉の舞」が銀メダルを取った時から、笑顔が定番だった従来の



のシンクロが変わりましたよね。

大沢 シンクロは欧米が発祥ですから、日本でも以前はクラシック音楽を使った演技が中心だったんです。でも外国の方から、日本は独自の文化があるのに、なぜ自分たちがもっと引き立つような演出をしないんだと言われ、日本文化が持つすばらしさにあらためて気づきました。

林 笑顔一辺倒だった当時のシンクロの世界では、考えられないテーマだったでしょ。ストーリー性がありませんでしたね。

大沢 女の情念や怒りを和楽器で表現するのは初めての試みでしたから……。女性独特の精神的葛藤を経て素敵なレディに成長していくさまを、外国の人にも理解してもらえるように表現したんです。

林 あれが大沢さんがシンクロの音楽に携わるようになった始めだったんですか？

大沢 そうですね。きっかけは、テレビのフォーマーシャル音楽の作曲やイベントのテーマソングを手がけていた頃、音楽制作会社の関連でたまたまシンクロの音楽作りのお話が来たんです。それまでは全く知らない世界でしたからね。

林 演じる側も音楽を作る側もそれぞれの思いがあるから、最初は大変だったんじゃないのかなあ？

大沢 井村先生はすごく個性の強い方ですから、あかんと思たら降りていいから取りあえずやってみて、

と言われて始めたんですよ。

林 へえーそうなんだ。それでうまくいったの？

大沢 それがねえ、先生はスポーツとしてシンクロをとらえてますから、音楽をメロディーよりもカウントとして考えるんですよ。私は音楽家ですからメロディーや和声を第一にして作曲します。それをプチプチ切られると初めは頭にきましたね。でもプールに行ってみて、先生が言われていることがよく分かったんです。それなら、メロディーから変えてしまえばいいんやと思えたんです。

林 音楽も大事だけれど、まず演技ありきというところがあるものね。

大沢 私はフォーマーシャル音楽の制作で、15秒タイプや30秒タイプという限られた時間内で盛り上げて引きつけるという仕事をしてましたから、割りきれたんやと思います。これは勝つための音楽作りなんやあってね。井村先生からは曲の構成やアレンジをめぐって、何度も練り直しが要求されますけど、意見をぶつけ合いながらとことん話し合って作り上げて行くんです。周りからはけんかしているように見えるみたいですけど（笑）。ほんとに真剣にぶつかり合ってるんです。私も負けず嫌いやから、必死になってとことん食いついて行きますよ。

林 じゃあ、馬が合ったんやね。二人はよく似てるもん。

大沢 えーっ、似てません！似てませんよ！（笑）。

★日本の精神文化のすばらしさ

林 日本古来の楽器を取り入れたのも良かったよね。大沢 そのお陰でいろんな邦楽の方と知り合えて、演奏会に行くようになりましたよ。

林 影響されることも多いんじゃないの？

大沢 すごく多いですね。西洋の芸術とは違い、「無」に意味があるという無の無限性が新鮮でした



ね。

林 簡素化して削ぎ落としていく中に、美的感覚があるものね。

大沢 美的感覚は日本人が世界で一番じゃないかなあ。秋の虫の声を美しいと感じたり、カラスの鳴き声やお寺の鐘の音に郷愁を感じたりね。

林 俳句みたいに五七五に凝縮された世界があるものね。

大沢 そんな日本的なものを大事にして、これからの子供たちに伝えて行きたいですよ。

林 日本の文化を教育として受けていなくても、日本人のアイデンティティとして体の中にあるような気がぼくはするけどね。

大沢 それはありますね。

林 日本の文化が海外に与えた影響も大きいよね。最近流行のコーチングにしても、自己開発セミナーにしても、禅思想や東洋思想の逆輸入みたいなところもあるしね。

大沢 もっと日本人が誇りをもって発信していかないといけないですね。それをシンクロがやっていると思うんです。

林 今は西洋的な発想に限界がきていて、東洋に求めるものが大きくなっているような気がするなあ。

大沢 私も最近それを感じましたね。日本科学未来館の仕事で屋久島に行った時、館長を務める毛利衛

さんも一緒に一緒だったんです。ご存知のように毛利さんは何でも科学的に分析して説明していく方ですねえ。私は感性で生きているほうですから、山を案内してくれたガイドさんと、このあたりに磁場を感じるとかこの杉は元気がないとか話したら、毛利さんに「君はなぜそんなことを言うんだ。その根拠は何なんだ。」って言われ不思議な顔されたんです（笑）。そう感じるんですから説明のしようがないですよ。

林 何でも説明つけてしまうのもねえ。ぼくは不思議な部分が残しておいてほしいなあ。サムシング・グレイト（偉大なる何かの存在）ってあるよね。大沢 私はシンクロの仕事を始めて、いっそう日本が好きになりましたし、日本的なものへの関心が強くなりましたね。

林 日本は地理的にちょうどいい位置にあるのかもれないね。ほかの大陸から離れ過ぎず近づき過ぎず。イギリスもよく似たような島国だけど、ドーバー海峡は狭くて歴史の中でヨーロッパからの影響が大きいものね。

大沢 外国の選手には林さんみたいな体つきの子もいるんですよ（笑）。色が真っ白で胸から下がすぐ足みたいな子も出て来るしね。でも、体格では日本の選手は負けていても、その清々しさやきりっとした美しさは他の国には絶対対馬でできないものがありますよ。

林 日本人には独特の雰囲気があるからね。

大沢 私は試合を応援に行く時、浴衣か着物で行くんです。そうすると必ず興味を持って外国の人が話しかけてきますよ。みんな憧れをもって日本を見ているんですから、日本人がもっと自信をもたないとね。日本にはすばらしい精神文化があるんですから。

林 大沢さんは普段でも着物を着ることが多いよね。



大沢 ちょうど日本のなにもに惹かれはじめた頃、アンティーク着物を見てうちに、その図柄や色づかいのユニークさセンスのよさに魅了され、おばあちゃんの着物や母のものをひっぱり出してきて着るようになりましたね。それに着物を着ると、周りの人が親切にしてくれるんですよ。楽譜や荷物を持ってくれたりして(笑)。

林 それが目的と違うの?(笑)。でも着物は季節感があっていいよね。

大沢 林さんも着ればいいのに。絶対似合うと思うわ。紬なんかいいんじゃないかな。いっぱい着て、着て!

林 そうか、着てみようかなあ(笑)。

★華やかさの裏のきびしさ

林 シンクロは華やかなスポーツだけど、練習はきついんだろうね。10時間くらいプールに入ってたままの時もあるらしいね。

大沢 見ててつらくなる時がありますよ。ここまで怒られるかというぐらい、選手たちは怒鳴られまくっていますからね。そんな時はプールの水の中が見える場所に行つて、選手たちの水中での様子をボーッとながめるようにしてるんです。

林 それだけ厳しい練習をしないと、あんなにレベルの高い演技はできないんだろうね。

大沢 ふうちゃん(奥野選手)は、先生からあれだけ怒られて感謝してるって言ってましたよ。大人になると、真剣に自分のことを思って怒ってくれる人はいないですからね。それと引退してからはメンチきることがなくなつたとも言っていました(笑)。試合前は強敵を前に、私らのほうがすごいんやでって、

にらみ合いするんですって。シンクロってまるで格闘技みたいでしょ(笑)。

林 それはよく分かるわ。試合前相手チームにたとえ親しい奴がいても話しかけたりしないし、ワールドでは目が合った時、視線はずした方が負けやからね。

大沢 選手はたとえ熱がある時でも、そんなそぶりは絶対見せませんよ。

林 よその人間は入りこめない真剣さがあるよね。

大沢 ほんとに真剣勝負なんです。私もシンクロ音楽を手がけるようになって10年目の節目ですから、ぜひ金メダルをとってもらいたいんです。

林 すごい思い入れがあるんだね。考えれば考えるほど、曲がなかなかうかんでこない時もあるんじゃないの?

大沢 先生に、「いつできるの、いつできるの?」って聞かれるんやけど、自分でもいつ出てるのか分からへんのですよ(笑)。

林 そんなもんなんだね。

大沢 でもね、今回の「阿波踊り」みたいに、いつもラッキーなことが起こるんです。「侍」の時も、お正月に偶然テレビを見ていたら、津軽三味線の吉田兄弟が出て、それであの三味線が小気味良い曲が出来たんです。人にも運にも恵まれているんですね(笑)。

林 今までのシンクロの曲を、CDにまとめたんですよ。

大沢 『アクアドリーム』というCDで、「夜叉」からアトラクタ、シドニアオリンピック、福岡世界水泳の新曲など11曲を収録しています。聞けば元氣になれるCDですよ(笑)。

林 4月にはアテネにも行って来たんだよね。

大沢 ええ、まだ工事中のところもたくさんありましたけどね(笑)。

林 お国柄って言うのかな。日本じゃ考えられないよね。

大沢 国によっていろいろありますね。イタリアやフランスの選手は子供の頃から、「前へならえ！」なんてしたことないから、真っ直ぐに並ぶということがうまくできないんですよ。

林 へえー、おもしろいね。日本人はそんなの得意でしょ。

大沢 日本選手はビシッとしてますよ。だからアテネでは審判が思わず10点をつけてしまうようなすばらしい演技を見せたいですね。

★元町通を三輪車で見回り：

林 大沢さんは神戸生まれでしょ。

大沢 そうですよ。諏訪山小学校に生田中学です。

実家が元町でテラーをやっていましたから、幼稚園の時は三越のライオン前から大丸まで、三輪車で毎日見回っていましたね(笑)。よく三越の屋上で金魚すくいもしたなあ…。

林 ピアノもその頃からやっていたの？

大沢 4歳からですね。でも、練習は大嫌いでした。毎年国際会館でピアノの発表会があって、帰りに元町の不二家でチョコレートパフェを食べさせてもらって…。学校から帰りにはお店屋さんをやっている友達の家をウロウロと道草してましたね。私はなぜか小学校・中学校と、その学校の名物先生といわれる変わって行くけど熱い先生のクラスだったんです。だからどんな変な人に会ってもあんまりビックリしないんですよ(笑)。

林 自分がいちばん変やったりして(笑)。

大沢 かもしれへんわ(笑)。

★ホツとする街・神戸

大沢 東京で仕事してても、海と山が見えないから息が詰まりそうになって(笑)。阪急電車で王子動

物園のあたりまで帰って来ると、両方が見えるからホツとするんです。

林 じゃあ、根っからの神戸っ子なんだね。

大沢 東京に嫁いでいる妹なんか、神戸のパンが恋しいっていつも言ってますよ。

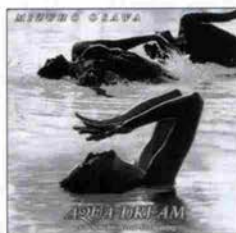
林 そしたら阪神大震災の時はどうだったの？

大沢 ちょうどアトランタ予選の曲「日本の雅」を作っていた最中やったんです。自宅が半壊して雅どころやない。とても曲なんか作れる状態ではなかったで、今回はちょっと…と井村先生に言うのと、「あなたの今の気持ちを曲にしたいと思うわ。あなたならできるわ。」と励まされました。それで完成した曲が「HOPE(希望)」。復興への思いを込めた曲で日本チームは予選を通過したんです。

林 大沢さんにとって井村先生との出会いがすごく重要なことだったんだね。

大沢 そうなんです。大きなチャンスをもたらったわけですからね。心から感謝をしています。精いっぱい自分のできることをして戦いたいですね。音楽を通して、日本のよさを多くの人に理解してもらえたらいいなと思います。

林 アテネでの日本選手の活躍を期待してますよ。



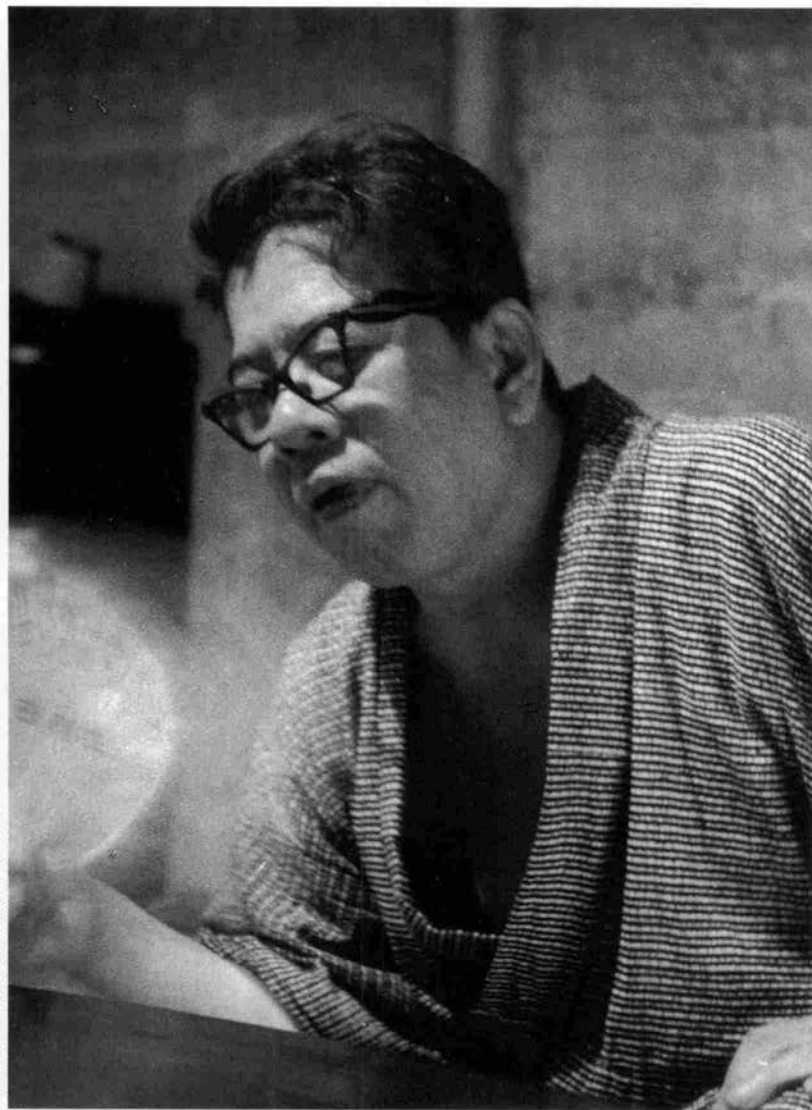
「アクアドリーム」
制作 NHKサービスセンター
販売 ビクターエンターテインメント

アテネオリンピック
シンクロナイズドスイミング競技予定
8/23 デュエット規定演技
8/24 デュエット自由演技予選
8/25 デュエット自由演技決勝
8/26 チーム規定演技「阿波踊り」
8/27 チーム自由演技



北野町かトア・ロード周辺に
モダニズム文学碑を

青木重雄



稲垣足穂／宇治市の恵心院で（昭和33年夏）

神戸市中央区の北野町がトア・ロードの周辺にモダンニズム文学発生の証明として、また同時に兵庫県（神戸・明石）の生んだ初期モダンニズム文学の作家イナガキ・タルホ氏（以下敬称略、「星を売る店」「二千一秒物語」は、ここいらを取材・テーマにしている）の文学的故郷の象徴として、ぜひこのあたりのどこかに初期モダンニズム発生の文学記念碑を建てたい——というのが、実は私の四十五年以来の夢であり、同時にタルホとの約束でもあったのだが、タルホはすでに「く（一九七七年没、いつか日は去り、今日に至っているというわけである。

四十五年前というのは、昭和三十四年（一九五九年）四月のことになるのだが、この時は神戸新聞社の文化部長時代で『青春と冒険』（傍題「神戸の生んだモダンニストたち」という題の本を出版したのだが、この本に一章を設けて書いたイナガキ・タルホ論が今回の文学碑建設のきっかけとなっているのである。というのはその前年の初夏の某日、私はこの本の取材のため京都府宇治市の宇治川べりにある恵心院という古寺へ稲垣訪問に出掛けたのだが、初めての出会いの第一問「何を考えてたんですか」に対して、即座の返事が「墓碑銘です」というのにまず度肝を抜かれた。このウルトラ・モダンニストの人間論や風変わりな小説についてはいろいろ読んで想像はしていたが、出会うなりこの墓碑銘の一言にはまずやられたという気がしたのだ。続いて「このごろの文学について」「映画？」「酒は」「女性」「美少年は」「神戸について」との私からの連続質問についてもタルホは続々と珍答を吐いてくれたのである。（だが、これらのことについては『青春と冒険』にくわしく書

いているのでここでは省きたい）

では、なぜ文学碑のことが話になったのかということだが、まず墓碑銘の話がとばしに飛び出したからである。私はあの時モダンニズム文学発生の件で北野町あたりに文学碑建設をもくろんでいたので、思わずその考えを口に出したのだ。するとタルホはすぐにその話に乗ってきた。

昔自分が熱中した北野町やトア・ロード付近の話になると、調子はぐんぐん上がって来たのだ。そして、二人共ついにモダンニズム文学碑建設の渦中の人物となってしまったのだ。

「コウベ」というと特にキタノ町の風景が思い出されますな、西洋館の黄色いカーテンには時々外人の女の影がうつっていたし」それに「外人の子供らが隠れんぼうなどをしていて、ハローと友だちを呼ぶ声がたまらなくエキゾチックでしたね」といったありさま。そして二人はついにモダンニズム文学碑建設で握手。「では、いよいよ作るとなれば、どんな素材で、どんな形で、そして文学碑に記す文句をどうするか」などを矢張り話し合っ、少々互いに興奮気味で分かれたのであった。

帰宅してからも、私は文学碑のことで頭が一杯だった。コウベの一番エキゾチックなトア・ロードの周辺にタルホの最もしゃれた言葉を書いた文学碑を作る。このすばらしいプランに私は没頭していたのだ。

この間のタルホとの交渉のいきさつ（電話もあったが、ほとんどは互いの手紙によるものだった）については、実は私は一冊のスクラップブックを作ってタルホの手紙などを貼り付け、いつでも自分が見、人にも見せられ

るような体裁にしていた。いろいろの細かい点についてタルホの意見や相談のことは、それこそ彼が愛した月や星の群のように美しく、しかもきびしかった。私はこのスクラップブックに「青春と冒険前後」という名前をつけて今も保存している。

だが、それ以後タルホの居場所は転々として変わり、今までのような楽な連絡はほとんど取れぬような困った状態に落ち入ってしまったのだった。

父が歯医者だった彼には天真爛漫さの半面科学的な素質に恵まれており、大正十二、三年ごろから日本に輸入された西洋映画「月世界旅行」にも深い執心と憧れとを見せており、結局彼が最後に作った例の文学碑の四行詩（彼自身は自分は詩人でないので、四行詩と呼ばれたくはないようだったが）の言葉の中でも、真つ先に月という文字が出てくるのである。何回もの手紙による相談と交渉の結果ついに決めた同碑の文句を左にかけてみよう――

「キネマの月

巷に昇る春なれば

ハローと言ひて

子らは隠れぬ

イナガキ・タルホ」

というのである。

彼は何回かの手紙の中で、まずキネマの月について、「キネマはキネマ（映画）仕掛のような満月。カラクリのような、舞台のせり出しのような丸いお月様の意です」と説明してくれているが、さらに「そのような明るい巷を照らす春の月下では、夕方北野町あたりで隠れんぼう遊びをしている青い目の子供たちのハロージェーンとか、カムクイックヒヤーとかいう呼び声がとてもエキゾチックで心

楽しかった」とか書いて来てくれているのである。

たしかにあのトア・ロードあたりは、大正から昭和時代へかけては、西洋人の居住者が多く、私などもよくぶらりと散歩に出掛けたものだった。

子供や犬を連れた西洋人たちやサリィを派手に巻き付けたインドの夫人たちの姿を見掛けるのがとても楽しかった。タルホの「星を売る店」の中に「日が山の端に隠れると、港の街には清らかな夕べが」やってきた。私はワイシャツを取り変え、先日買ったすみれ色のパウを結んで外へ出た。青々と繁ったブラタナスがフィルムの中の孔のようにならんである山通りに差しかかると、海の方から涼しい風が吹き上げてくる」と書いているのもあのあたりの澄んで明るい感じの情景である。

この碑に彼の選んだこの四行詩にもあのあたりのとても明るく、エキゾチックな感じが端的に示されていると思う。

さて、いよいよ文学碑を作るとなれば、まず土地選びに取りかからねばならない。「神戸を愛する神戸人」（かつて竹中郁が作っていた会の名前）の愛情と努力によってこのイナガキ・タルホの四行詩を刻んだモダンズム文学碑を建てたいと願ってやまないのである。

（神戸生まれの美術評論家、文芸作家）

●イナガキ タルホ文学碑

“キネマの月の碑”を建てよう!!

陶芸評論家で、作家の青木重雄さんは、九十才を迎えて、第三回目の小説「最も平凡な男」を上梓され、五月三十日(日)正午より、県民会館において出版記念会が催された。老いてますます盛んという感じだ。

第一回目は「母狩りの手毬唄」(平成十二年五月一日刊/少年時代の鳴尾における母狩りを背景に取材)と、第二回「最後の舞踏会」(同十四年四月二十日刊/青年時代の神戸商館生活と神戸鈴蘭台ダンス・ホールなどに取材)に次ぐもの(地方新聞社の美術記者としての体験を中心に、青壮年・老年時代に取材)である。

三冊とも青木重雄さんの約七十年の体験だ



『モダニズム文学碑』建設賛成者氏名

あおき・しげお 松井高男 小林幸和 明石弘三 西村隆
梶真澄 小倉尋富 南和恵 前田玲子 山本早苗 石上道子
高山るみ子 田島潤子 山城はるみ 西河文美子 大石京子
刈尾七彦 日高邦比古 北村圭泉 田淵洋子 片岡武義
西井逸男 一色範彦 小泉美喜子(敬称略)

が、大正から昭和へと神戸文化史でもある貴重な私小説といえようか。

今回、青木さんの提言は、イナガキ タルホの文学碑を、北野に!ということだが、

「キネマの月

巷に昇る春なれば

ハローと言ひて

子らは隠れぬ」

神戸のモダニズム発生の文学碑ということ、震災復興十年の企画として、北野町に「キネマの月の碑」として、できれば北野浄水場跡の「北野クラブ・ソラ」界限に建立できればと思う。青木さんの提言で、「モダニズム文学碑」建立実行委員会を設立して行きたい。

(小泉美喜子)

□ 名器に出会う □

半使三島茶碗と東山焼盃 いただきものの二つ



半使三島茶碗

青木重雄

〈ひょうご愛陶会顧問〉

「どちらでも、好きな方をお取りになって下さい」と言われて、私はしばらくためらった。右と左に古萩茶碗と高麗茶碗が並べて置かれている。以前にも御主人の細見英さん（耳鼻咽喉科医院長）から伊羅保茶碗を頂戴したことがあるので、これ以上はともと思っただけだが、順子奥さんからこうあっさりと言われては心臓がどきまきするだけだった。

「手にとらせていただきます」と言って、まず古萩茶碗をとって眺め、次いで高麗をとって内部をのぞき込んだ。一瞬、私はあっと声を揚げた。見込全体のポーッ

とした淡紅色の土の色のなんと美しいことであろう。さらに「目跡」の五つある中心部ではその赤色がやや増している。胴部には白い俵形の文様がごく薄く認められる。「朝鮮でしょう」と奥さんから言われて、「三島茶碗のように思いますが」と答えた。とにかくこの見込の淡紅色の土色の美しさに圧倒されたのである。

「では、こちらをいただきます」とあっさり言ってもう一度両手で抱きかかえた。なぜか共箱が無いのが気になったが、奥さんのさし出された桐の当て箱（無文）に入れてもらって、摂津岡本の丘の上にある細見

家を辞去したのだった。昭和五十一年の春のことであつたと思う。細見さんご夫妻とのお付き合いは、細見さんが自分の故郷である三田市の実家に所有の古三田焼約百二十点(冊子、文書類も含む)を寄贈されるというので、ちょうど白鶴美術館を辞めて間無しの私に「手伝ってほしい」と声がかかって来たからだ。私は早速応じて昭和五十二年の春から約一年間を三田通いで寄贈品の整理と陳列などに力を尽くした。そのお礼の意味でこの茶碗をいただいたものと思うが、とにかく細見ご夫妻とのお付き合いは心の美しさに富むもので、一生忘れられない私の思い出となった。細見さんは五十四年三月紺綬褒賞を授賞されたが、同年八月二日惜しくも他界された。

私は以後この李朝茶碗を先生への思い出として、また私の愛する高麗茶碗の代表として大切に保存し、よく茶を点てているが、その後いろいろと調べた結果この茶碗が半使三島茶碗であることを確認することが出来た。半使とは桃山時代から江戸時代へかけて朝鮮から日本へたびたび国交の使者として正吏、副吏が派遣されたが、これに従うのが半使であり、通訳が仕事で

あつたと言う。

そこで拙句を一つ――

「大徳寺にて半使の使いし茶碗とか淡紅色の魅力
をたたえつ」

もう一つの東山焼(姫路)の染付盃は、十年ほど前東京武蔵野のMさんという趣味人から突然電話があつて、「実は自分はやきものが大好きで、全国のデパート展、神社の境内展などを立回り多数の作品を集めているが、兵庫県下のもものでは明石、舞子、三田焼などを中心に持っている。あなたの著書『兵庫のやきもの』を読んで一度あなたにお会いしたい、その上都合によって処分したいと思うが……」との電話がきっかけとなつて出会うことになり、県民会館で会った。その結果何かを陶友に紹介したりした。三回出会ったが、その最後の時に「お礼に」と言ってもらったのがこの染付盃(東山焼)だったのだ。

この染付盃はまぎれもない東山焼で裏の高台見込の中央に「姫路製」の染付銘がある。胴部には鳥や岩、熱帯植物のような木枝などが描かれている。見込の口辺を取り巻いている団花文の群、底にも小さい同団花文の群の中央に〇〇年製と書かれているが、字が難解で読みにくい。中国年号と思われるのだが残念である。共に思い出の深い珍品である。

(サイズ)

■半使三島茶碗

高さ9・0センチ

口径13・4センチ

■東山焼染付鳥・岩文盃

高さ3・3センチ

口径7・2センチ



東山焼染付盃